
~ 異世界の歩き方 ~ ミリオタ風味

エルダー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

＼ 異世界の歩き方 ＼ ミリオタ風味

【Nコード】

N3665V

【作者名】

エルダー

【あらすじ】

ミリオタで平凡な高校生こと山下柳夜くんがテンプレ的に死んでテンプレ的に異世界に行く物語。
ヤマシタリユウヤ

第0話 テンプレ的なプロローグ (前書き)

よろしくお願いします。

第0話 テンプレ的なプロローグ

突然だが自分は死んだ。

死因はトラックに跳ねられ事故死。間違いなくテンプレ乙だ・・・

自分の名前は山下柳夜平凡ヤマシタリュウウヤな高校一年生だった。顔は普通よりチヨイ上かな？。高校もまた平凡なレベル。賢くもなくバカでもない高校だった。成績はこれも平凡。平均よりやや低め。かといって余りに低い訳でもない。部活は所属していないという訳で帰宅部。しかし運動神経は良かったほうだった。趣味はゲーム（FPS類）、読書、運動、あとはミリタリーだ。自分は自慢ではないがミリオタだ。戦車、銃火器、戦闘機、艦船、戦術、戦略など軍事関係をこよなく愛していた。今回もミリタリー雑誌を買いに行くときにこれ・・・。未練といえばこれだけだ。両親は早くに他界してるし、育ててくれた祖父母は1ヶ月前にまた他界した。いじめなどは受けてなかったが、そんなに思うことでもない。今月号は空自のFX（次期戦闘機）特集だったのにな・・・。

と思いつながら現状を把握してみる。前記にテンプレと言ったのを覚えてるだろうか？そうまさしくテンプレ。

今いる空間は真っ白だ。そしているのは自分とある土下座中の少女・・・

正直怖い・・・。

自分が気づいた時からこの少女は土下座をし続けている。多分もう30分位この状態が続いている。

「……とりあえず土下座は止めてくれない？」自分が優しく言う
とバツと顔を上げた。

よく見るとかなりの美少女だった。茶髪のツインテールにまだ幼さ
が残る顔……。

うん、とる魔の禁目もしくはあ科の電砲で出て
る白黒さんではないですか！

「もーしわけありませんですのお！ついうたた寝をしていました
らこのような結果になりましたのお！」

再度土下座モードに変身しながら自分に理由を説明する 井子さん

話を聞くと、井黒さんはテンプレ通り神らしい。言った通り寝
ぼけて神ノートというノートをコーヒーで汚したらしい

神ノートとは、その名の通り神のノートでそこに書けばその通りに
なるらしいそれを神自身が汚した「世界を汚したとなったらしい。
実際世界中で約500万以上の交通事故、200万以上の殺害事件
が同時刻に同時に起こったらしい。それに自分は巻き込まれたわけ
だ。今回汚したページが丁度自分の個人情報載っているページだ
つたらしい。それで自分に謝っているということ。

「で、自分はどうなるの？」

一応自分の今後について聞いておこう

「元に戻るの？」「……残念ながらそれは無理ですの……
・、ご存じの通り神ノートはコーヒーで濡れてしまいましたの。」
そう言っつてシユンとうなだれる神。

「少しだけ汚れたならまだ修復神技という技で直せたのですが、こ
のように……残念な結果に……。」

そういつて神は自分が汚した神ノートのある1ページを見せる。そこには自分の名前コーヒーまみれで何がなんだか分からない文字が・・・しかもコーヒーの匂いがプンプンするぞ。

「なので元の世界には戻れませんの・・・。」「じゃあこのまま天国に行くの？」

「そういう訳にはいきませんので異次元の世界に行つて第2の人生をおくつてもらいますわ・・・。」

まさしくテンプレと・・・

「という訳で、あちらの世界で暮らしていけるように何か欲しい能力はありますか?」「というか、その世界に行くことは決定事項なの?」「・・・はい決定事項ですの。」

・・・コイツカッテスギルダロ・・・

まあ仕方がないかと思ひ能力のことについて考える。そして貰う能力は以下の通りにした。

身体強化 (H L シリーズのマスター ーフ並)

創造魔法 (現代兵器、古代兵器、架空兵器関係なく。コンバットナイフのような小さい武器から空母のような大きな艦船まで創れる。服、食料なども創造可。)

軍事関係知識データベース (軍事関係情報すべて解る)

ミリオタイエイ（＊ ＊）軍事チートイエーイ、（ ）／

「さてそれでは行きましょつか。」神がそう言うと自分の足元に魔法陣が描かれる。

そして魔法陣の中に沈み込んで行った・・・

そして物語は始まる。

第0話 テンプレ的なプロローグ (後書き)

正直駄文デスネ・・・

第1話 異世界と山賊と・・・ (前書き)

よろしくお願いします。

第1話 異世界と山賊と・・・

どうも山下くんです。只今絶賛落下中です。

何でこうなんだろ？というか何でこうなったんだろ？

魔法陣の光に包まれて目を開けたらこの状況

誰か！ヘルプ！……何とかしてくれ……！！

改めてども山下ですミリオタです。奇跡的に助かりました……。
川に落ちて……。

数メートル間違っただけで落ちていたら完全に死んでましたね……。
はい。

川から上がり、最初に気づいたのは、身体能力が上がっていることですね。視力も上がってるし、身体も引き締まっている気がします。正直チート？と思っていると、空から一枚の紙が落ちてきました。

読むと、

『山下柳夜さまへ

このたびの一件深く反省していますの。どうかその世界で楽しい第2の人生をおくってくださいまし。さて今いる世界は文明レベルは中世程で、魔法や魔獣などがありますの。不自由な事もあるかもしれませんが頑張ってくださいまし。

神より』

・・・今思うと自分の中の子のキャラ変わってしまったな。腹黒テレポーターじゃなかったっけ。

そんなことを思いながら創造魔法を試すことにした。創造魔法の仕方はまだ頭の中に創造したい物をイメージするだけらしい。

・・・できた。・・・

ただ単にM4A1カービンを想っただけで、手にはずっしりとM4A1の重みが伝わってくる。

一応とばかりに単射で木の幹に撃ミニオートってみる。

ダンッ！

ビシッ！

・・・実弾デスカ・・・

ダンッ！ダンッ！ダンッ！

フルオート
連射に変えてみる

ダッ！ダダン！ダダダン！ダダダダダダン！ダダダダダダン！
ダダダダダダン！カチン！

マガジン一個分の弾を消費した所で一息着いた。

まるで夢みたいな気持ちだった。

その後色々なことをしてみた。

わかったことは

オプションパーツも創造可（例1）ドットサイトをイメージド
ットサイトが現れる（例2）M4A1にM203グレネードランチ
ャーとドットサイトをイメージ M4A1+M203+ドットサイ
トの完成

弾の種類及び弾数の変更（例1）実弾 ゴム弾（例2）弾数無限
大チート

創造したものを消せる（仕舞える？）（例）M4A1創造 消去
をイメージ 消える。ただし自分が創造したもののみ

大型なものも創造可（例）今日の出した最大の物はFIM-92
ステインガー携帯式地对空ミサイル ちなみに撃ってはいない。

創造し過ぎると疲れる。

雑貨も創造可

まあこんなところかな。

背囊に食料、水、サバイバルナイフ、応急キットなどを創造し、リュックに詰める。主武装に^{メインウェポン}SCARH (STD)を選び、ホルグライフックドットサイトと^{バイポッド}二脚、M230グレネードランチャー、サプレッサーを着け、^{サブウェポン}副武装にM9 (ベレッタM92F)を選びホルスターに入れる。服は着ていた学生服から迷彩服に着替える最後にホルスターとコンバットナイフを腰に着け、背囊を背負えば出来上がり。

さあ異世界旅行に出発！！

side 三人称

この世界は文明レベルが中世程だから治安は良くはない。だから盗賊や山賊、海賊などウジャウジャいる。

ここは ユーロピア王国 南部に位置する ウルガタ渓谷 に流れる ウルガタ川 のほとり。ここに5人の男女を20人程の男が包囲していた。20人程の男達は斧や鎌、剣を持っている。俗に言う山賊である。対する5人の内1人の男性騎士と2人の青年は剣で武装している。残りの2人は女性で1人は女性騎士でレイピアを持ちもう1人はクロークのようなもので顔を隠している。分かるのは身長のみ。大体160センチ程度だ。

「だ〜か〜ら〜その女渡してって言ってるだろうが」山賊のリーダーらしき人物がニヤニヤしながら5人に言ってくる。すると山賊達が口々に「そうだ！そうだ！」「手荒なまねはしないぜえ！」「マアそっちの女は分からないけどなア」と口々に言う。すると男性騎士が「我々がユーロピア王国軍の騎士だと分かっての狼藉か！！」と大声で言う。「ああ！お前らが王国騎士か？それなら俺らの後ろで死に絶えている能無し共もお前らの仲間か？」「の、能無しだぞ！」「つつ！」「・・・」「男性騎士は驚愕し2人の見習い騎士も漠然とした顔になる。ただ1人冷静だったのは女性騎士ただ1人。「だってよお、満足に主君を守れてないんだぞ。それならただの能無しだろう？違うか？」「ニヤニヤ笑いながら男性騎士に言う山賊リーダー。「き、貴様ー！」「さて！ゾルザ！！」女性騎士の制止も聞かず山賊リーダーのもとへ肉薄する。それに山賊5人が一斉に飛びかかる。ゾルザと呼ばれた男性騎士は立ち向かって来た山賊5人の内4人を殺すが、最後の1人に後ろから刺された。「ぐああ！」「・・・そしてゾルザはゆっくり倒れた。「ゾルザ！」「ゾルザ！？」」「ゾルザ副隊長！」「残った4人が倒れた男性騎士の名前を呼ぶ。

もはや絶対絶命。 解決策はない。 あるのは絶望ただひとつ。 援軍が

来る可能性はない。一個騎士隊（15人程度）のほとんどが殺され残りの騎士は見習い2人と女性騎士1人の計3人。絶望感ただそれしかない。

どうか援軍が来てくれ

だれでもいい

ただそれだけのことだ

だがそれも叶わない

山賊のリーダーは「しゃあねえなあ。どうしてもその女渡さないて言つなら」リーダーが鞘から剣を抜く。丁寧に磨き上げた鋭利な剣。

ああもう終わった。

誰もがそう想った。

「お前ら！やつ！」「チュン！チュン！」「

乾いた音がしたと想ったらいままでニヤついていた山賊リーダーが頭から血を流して立っていた。そして体長2メートルもの巨体が前にドツと倒れた。

皆何が起こっているのかわからなかった。

チュン！チュン！チュン！チュン！チュン！チュン！

また音がしたとなれば4人同じように、あるものは頭からあるものは胸から同じように血を吹き出し倒れる。

「な、何が起こっているんだ!」

「魔法か!? 魔法なのか!」

「こんな魔法聞いた「チュン! チュン!」「グアア」

1人また1人とどこからか血を吹き出しながら倒れていく山賊達。

「どこだ! どこにいる?」

「いた! あの木近くにいる。」

「どこだ! ?どこだ! ?」

「あの「チュ! チュ! チュン!」「ガハア!」

「やっちまえ!」

まだ生きていた山賊8人が一斉に木に隠れているものに襲いかかった。

side 山下柳夜

「なんで、こんなことしているところに来たのかな?」

そういつて向こうで起こっていることを見ながら溜息をはく。

向こうでは20人くらいの山賊?が5人の騎士たち?を取り囲んでいる。

・・・死亡フラグは立てたくないなあ・・・

と呑気に思っていると体長2メートルくらい(っっていうかでか)の大男がニヤけながら何かを言うと1人の男性騎士が怒って突撃する。そして困まれ終了。

・・・助けるか。

自分がそう思った理由は

異世界第一村人発見

my良心が助けると言っている

情報収集にうってつけ

my戦闘力かどんなものか

だから助ける！！

異論は認めん！！

と言っわけで準備する。

背囊を下ろし、SCARのマガジンの弾を無限大にし、伏射の体制をとる。背囊を土囊替わりにし、SCARを安定させる。セレクタIを単射に切り替えドットサイトを覗き、中心にある赤いドットを

山賊のリーダー？らしい大男の頭に当てる。

指が震えてる。

今から初めて人を殺すのだ。

殺らなければ・・・殺られる

殺らなければ・・・彼らが殺られる。

分かってはいるけど震える。

殺るのは怖い。だが殺られるのはもっと怖い。

躊躇う暇もない

殺るんだ！！

自分はこの世界で生きていく

この世界に必要なことは実行しなければならぬ

過去の常識は通用しない。

なら・・・この世界の常識に合わせるまで！

そしてトリガーを二回引いた。

side 三人称

サブレッサーで音と発射煙が軽減され、勢い良く7・62? NAT
O弾が二発発射され、山賊リーダーの頭に吸い込まれるようにして
向かっていき、頭蓋骨を貫通した
ドットサイトごしに山賊リーダーの巨体が前に倒れるのを確認する
と次の標的に狙いを定める。

1人2人3人と確実に仕留めていく。

半分くらい殺^やったところで山賊が木の近くにいらっしゃる気づき、
こちらに向かってきた

SCARに付いているM230グレネードランチャーを構え、40
?グレネード弾を発射する。

バシユツ!という音を立て山賊達を中心辺りに着弾し、山賊6人を
吹き飛ばす。

残りの山賊3人をフルオートで一掃する。

辺り一面死体だらけになった。

一応1人1人死亡を確認していく。

すると1人素早く起き上がり襲いかかった。しかし、冷静に足に一発撃ち込み、行動を鈍らせる。そして銃床ストックで殴る。「グハアッ！」殴られ盛大に吹っ飛ばす山賊。最後に頭に銃口を突きつけ一発叩き込む。

タアーン・・・

最後の銃声はまるで終わりの合図のようだった・・・。

第1話 異世界と山賊と・・・ (後書き)

正直駄文っす。

第2話 〈助けた後の話〉

「私達を救っていただきありがとうございます。」

山賊？を退治した自分の目の前には美少女がいます。これが今の現状。まるでマンガとかに出てくるお姫様系少女！

「わたくしはメリサ・ド・ルクレールと申します。こちらのものはわたくしの護衛です。」

そういつて3人を紹介するメリサさん

「近衛隊第2騎士隊長のルイス・キャパレルだ助けてくれたことに感謝する。」

そういつて握手を求めるルイスさん。てか小隊長でしたか。

「・・・リュウヤ・ヤマシタです。・・・平凡な・・・学生です。」

こんなに自己紹介に困ったの初めてだ。

だって自己紹介なんて趣味とか部活とか言えば良かっただけじゃん。

向こうの世界では・・・

今いる世界は異世界。今までしてきた自己紹介なんて八割くらい分からないだろ。

「……………学生ですか？」
「……………学生には……………見えないが。」

ジロジロ見てる、ジロジロ見られてるよー！

今の状況

メリサさんルイスさんを含む4人がジロジロ見てる。

自分の服装

- ・迷彩服（自衛隊の迷彩服？型）・背囊
- ・SCAR-Lという名の武器
- 不審者確定…………

はあどうしょ

はあ疲れた。1から説明するのはつらかった。

あの後

- ・気がつくところだったこと
- ・身に覚えのないところだと判り、異世界に来ちゃったと思ったこと
- ・正直困っていること

を話すと

「なら、王都へ行きましょう。きっとお役にたてられます。」
と言われたので一緒に王都に行くことになった。

「……………」
今は死んだ騎士たちに黙祷を捧げている。
目の前には人数分の騎士の剣がただ刺さっただけの墓がある。

「…………先輩。」

隣では見習い騎士のドリーと同じく見習い騎士のライルが悲しそうに墓を見ていた。

無理もない。自分達と小隊長以外は全員死んだのだから。

後ろの方ではメリサさんとルイスさんが同じように悲しく墓を見つめていた。

「…………あなたたちの」

自分は無性に喋りたくなつた。

「…………あなたたちの頑張りで…………あなたたちが体を張って守り

たかったものは・・・守られました。」

喋らなくてはと思った。

「あなたたちは英雄です。自らの命と引き換えに、守るべきものを守ったのですから。」

「あなたたちが命を懸けて守ったものは若いこの2人が同じように守っていきます。」

「今日起こったことは、彼等は忘れません。そして彼等はあなたたちと同じように誇り高き騎士になるでしょう。」

「今はまだ生まれたての雛鳥です。ですが数年後には立派になっていくはずですよ。」

隣の2人は泣いていた。

「あなたたちが背負っていた世界は彼等2人が同じように背負っていきます。ですから安らかにここで彼等を見守ってあげてください。」

自分はここに眠る騎士計11名に向かって敬礼した。

後ろでもすすり泣く声が聞こえた。

夕焼けにが静かに当たりを照らしていた。

《ウルガタ溪谷に流れるウルガタ川ほとり》

《夜》

騎士11人の墓を作り終わった時にはもう日は暮れかかっていた。そこで野営をする事になった。メリサさんには馬車で寝ることになり、他は外で寝ることになった。

「先程はありがとうございました。」

じつと火を見つめてた自分に声をかけたのは隣に座っていた見習い騎士で自分と同じ年齢のライルだ

「別にそんなこと言わなくてもいいよ。当たり前のことしたまでだし。」

「ですが・・・」

「それに、敬語なんて使わなくていいよ。自分まだ15歳だし、同じ年でしょう?」

「・・・わかった。」

そういつてまた静かになった。

「そういえば、どこから来たんだ？学生というのは本当か？」

いきなりだねえ〜　　そういえばちゃんとした自己紹介もまだだったかな。

「もう一度自己紹介するけど自分の名前は山下柳夜^{ヤマシタリュウヤ}。姓がヤマシタで名がリュウヤ。こっちはリユーヤ・ヤマシタかな？」

住んでた国はニホン国。遠い遠い結構豊かな国。

言ったとおり学生。今はどの学校にも属していないから元学生と言ったほうがいい。

それでなんだかんだで旅する事になったんだけどなんか解らないものに吸い込まれてこの・・・ウルガタ溪谷だっけ？にいたわけ。そしてまたぶらぶら歩いていたらみんなを見つけたわけ。」

ふ、カンペキな模範解答だゼツ！

「まあ正直助かったよ。」

そういつて締めくくった。

その後またいくつか質問された。

日本のこと、持っている武器のこと。途中から、寝ていたはずのメリサさんが起きてきて、2人で話していたのが、最終的に5人で夜が明けるまで語り尽くした。

第2話 へ助けた後の話 (後書き)

携帯で書くのツライです。

第3話 馬車の乗り心地 (前書き)

構成考えるのに時間かかりました。しかも相変わらずの駄文です。

第3話 馬車の乗り心地

ゴトゴト。ゴトゴト。

夜が明け、朝日が溪谷を照らすころ、自分達は残った馬車一台でユーロピア王国の都市トラスサに向かうことになった。

見習い騎士のドリーとライルは馬車を操ることになり、メリサとルイスは馬車の中に座った。

わかっている人もいるかもしれないがメリサはユーロピア王国の王族で第2王女らしい。

メリサは周辺友好国を回って帰ってくる途中に山賊に襲われたのだった。

つまり自分が救ったのは一国の王族でお礼がしたいと

ということ今馬車の上に座っている。

どうして上なのか。

それは場所がなかったから。

さすがに王族と一緒に座るわけにはいかず、かといって他に座る所は取られている。

ということ呑気に空を見ながらポーっとしていると馬車の窓が開き、

「リユーヤ！今トラスサにある北部上空軍基地に連絡ができた！飛竜を4騎送るらしい！」
「^{バン}」

とルイスさんが大声で言ってきた。

「ワイバーンってなんですか？」

「ワイバーンを知らないのか!？」

自分が普通に問いただすとルイスさんは驚いて問い返した。

「自分の国にワイバーンなんていませんでしたから。強いですか？」

自分が言うと

「ワイバーンは竜族の亜種だ!強いに決まっている!」

彼女が言うには竜族は賢く、強い。それだけでなく、魔力も多いため、この世界の最強の種族らしい。

このワイバーンは中型亜種竜族で各国の空中戦力の要として働いているらしい。

「そんな便利な移動手段あるのならこれ(馬車)動かす前に呼んで下さいよ。」

「仕方がないだろう!いつもつながる通信球がつながらなかったのだから。」

通信球・・・この世界の携帯的?なもの。この通信球にある魔力を使い、遠くにある通信球を意識し通信する。魔法が使えない人でも簡単に遠くに通信できるもの。

そう通信球を持ち、振り回しながら怒鳴ってくるルイスさん。

ルイス危ないですよとメリサ姫に注意されている姿を見ながらふと思いついた事を口に出してみる。

「その通信球での通信を妨害されていたとかは？」

ルイスさんが振り回していた手が止まり、一瞬時間が止まった。

「・・・なぜそのような事が言える？」

「・・・いや、自分の国には魔法とか魔術とか関係ない話なんだけどたしか電波通信を妨害するECMというものがあるから魔法とか魔術にもそのような技があったりしてと思っただけ。」

そう言うとルイスさんはすぐさま

「ドリー！！ライル！！スピードを上げろ！！！」

「はい！？」「」

「いいから上げろ！！！」

前方の2人に怒鳴りちらした。

急にスピードが上がり、

「のわああ！？」「」

と情けない言葉を吐きつつ馬車にしがみつく。

「どうしたんですか！おかげで落ちそうになりましたよ！！！」

と馬車の窓に向かって怒鳴る

「君の言うとおりだ！確かに妨害魔術という魔術がある。魔術によ

る通信及び連絡を妨害する魔術だ！それをするには最低5人の魔術師がいる！」

「妨害範囲から離れた自分たちを追ってくる可能性がある。」

「妨害魔術は周辺全てを妨害するのではなく、定めた一定の範囲を妨害する。それだけでなく定めた範囲のことはある程度わかる。通信球の性能、大きさ。だれがもっているか、だれが使っているか。一種の探知魔術だ！」

「一種の探知魔術……。」

自分がそういうと今まで進んできた道から土煙が舞っているのが見えた。

「見えました！！数は約10！！」

自分がそういうと、ルイスさんが体を窓から乗り出し後ろを見てる。

「自分が撃退します！ドリー！ライル！まだスピード出せる？」

自分がそう言うのとドリーが顔を後ろに向け、

「これ以上は無理です！」

と大声で言ってきた。

自分はスキルを使い、M249ミニミ軽機関銃を創造する。

M249ミニミ軽機関銃……ミニミの愛称で知られる軽機関銃

(分隊支援火器)

そして後ろに銃口を向け5・56? NATO弾を次々に吐き出し、騎馬隊を次々に倒していく。

後ろの騎馬隊も氷の槍や火炎放射などの魔術で反撃するが馬に乗っているせいで攻撃は当たらない。

対してこちらは分隊支援火器。

接近してくる敵に弾幕をはり、接近させないようにするための軽機関銃。

この場面に打ってつけの銃だ。

フルオート射撃とバースト射撃を交互に行いながら次々に敵を打ち抜いてゆく。

「ワイバーンはまだですか!」

ミニミの発砲音に負けないように怒鳴り散らす。

排出される薬莢を避けるために中にいたルイスさんが

「……着いたら……どこに……わか……い……」

「何言っているかわからん!」

一旦射撃を止め明らかに声が負けているルイスさんに向かって怒鳴る。

「どこにいるのかわからないらしい!」

自分はミニミの弾の曳光弾の割合を多くする、あらかじめルイスさ

んに光がでること、それを目印にしてもらうことを伝えると空に向かって連射しまくった。

ルイスさんは突然のことで面食らっていたがすぐに理解し、そのことを伝え始めた。

30秒位だろうか、1分位だろうか

風を切る音と共に2騎のワイバーンが急降下し、ファイヤーブレスを吐き出す。

気付けば追っていた賊は反撃する暇もなく灰となっていた。

第3話 馬車の乗り心地 (後書き)

次から後書きに登場人物について書いていこうと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3665v/>

～ 異世界の歩き方～ ミリオタ風味

2011年10月9日09時08分発行